

論文内容の要旨

氏名	李 相太
The impact of toxigenic culture on antimicrobial prescriptions for <i>Clostridioides difficile</i> infection: The role of diagnostic stewardship	
(和訳)	
毒素培養が <i>Clostridioides difficile</i> 感染症の抗菌薬処方に与える影響: diagnostic stewardship の役割	

論文内容の要旨

【目的】

Clostridioides difficile 感染症(CDI)を検査する際、毒素検出感度向上を目的として、培養コロニーからの toxigenic culture が推奨されている。しかし、toxigenic culture と CDI の治療などの臨床判断との関連について評価した研究はない。

【方法】

奈良県立医科大学附属病院では、2013年11月からイムノクロマト法による *Clostridioides difficile* の抗原(A)と毒素 A/B(T)の検査を実施している。さらに、2018年4月からは毒素培養(C)を採用している。そこで、CDの検査を受けた患者を、2014年4月から2018年3月までの前期間と、2018年4月から2021年3月までの後期間の2つのグループに分けて、患者データを後ろ向きに検討した。

【結果】

前期間では1262例、後期間では1023例を対象とした。A+T+症例は、前後期でそれぞれ64例(5.1%)、28例(2.7%)と、有意な減少が確認できた($P=0.005$)。後期に毒素培養を行ったA+T-症例104例のうち、54例(51.9%)がA+T-C+であった。A+T-C+症例の抗菌薬投与率(68.5%)は、A+T+患者の抗菌薬投与率(前後期でそれぞれ90.6%と82.1%、 $P=0.014$ と $P=0.417$)よりも低く、A+T-患者の抗菌薬投与率(前後期でそれぞれ64.2%と64.1%)やA+T-C-患者の抗菌薬投与率(64%)とは有意差がなかった。

【考察】

本研究では、毒素培養は必ずしも抗生物質の投与比率や投与期間に影響しないことが示された。毒素培養の報告と解釈を改善するために、diagnostic stewardship の下での協調的なアプローチが必要である。